

パネル 2014年度石巻市鮎川での企画

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東北学院大学文化財レスキュー班 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/363

脱塩の目的と作業過程

文化財レスキュー後の取り組み 2013～2014

●脱塩の目的

東日本大震災で被災した文化財の中には、津波の被害に遭い、その多くが塩水に浸ってしまいました。私たちは、塩による劣化を防ぐために、脱塩作業を大学内で行っています。

脱塩は、まず資料を水に浸け、1～2週間ごとに水を取り換え、塩分濃度が下がるまで繰り返します。2～6週間で資料を水から取り出し、乾燥させ、仕上げにオリーブオイルでコーティングをします。

こうした作業は、保存処理の専門家の指導を受けながら、学生自身が行うため、文化財保全の勉強にもなっています。

●脱塩作業

まず初めに脱塩する資料をピックアップします。ピックアップされた資料をテンバコに入れ、脱塩を始めた日付、テンバコのグループを記入したガムテープをテンバコに貼布しておきます。日付は、脱塩を始めてから水から取り出すまでのくらの日数を要したか調べるためにメモします。また、3～4つのテンバコを使用して脱塩を行うため、グループを明記する必要があります。

次にテンバコの中に水を入れる作業に移ります。水を入れる際に注意すべき点は、直接資料に水をあてないことです。

水を資料にあててしまうと破損の原因となるため、水をいれる際は資料のない部分に流し入れるか、テンバコの側面に水をあてて入れるようにします。木製品などの軽いものは浮かんできてしまうため、おもりを置いて浮くのを防ぎ、資料全体を水に浸らせます。

最初の検知を行うため、紙コップでテンバコ全体の水をかき混ぜ均等にします。その後、検知管を使い最初の塩分濃度を計測します。計測値をメモし、計測した検知管は国立民族学博物館の専門家の元へと郵送します。水を入れた状態の写真も撮影し記録しておきます。おおよそ4日～1週間以内に最初の水換えの指示が入るため、学生が水換えを行います。写真を撮影してから、水換えをし、塩分検知を行います。この時、木製品などはぬめりが発生する場合があるため、その際はスポンジで取り除きます。検知管は再度国立民族学博物館へと郵送し、水換えしたテンバコの写真撮影します。この作業を、引き上げの指示を受けるまで繰り返します。塩分濃度が下がり、水から取り出す指示がでたら資料を引き上げます。

●サビ取りとコーティング

脱塩が完了し、水から引き上げると資料が空気にふれ、サビが生じてしまいます。そのためこのサビを取り除く作業を行う必要があります。まず、脱塩が終わった資料を水から取り出し、ブラシでサビを取り除きます。サビが舞うためマスクをし、資料の隅々までしっかりとブラッシングします。サビが除去できたら、資料を保護するためにオリーブオイルを塗っていきます。この際、金属以外の部分にはオイルがつかないように梱包材でおおい、金属の部分には塗りムラが生じないように均一に塗っていきます。塗り終わった資料は、オイルが乾くまで2週間ほど安置しておきます。これで脱塩作業は完了となります。



検知の様子



脱塩中の資料



サビ取りの作業